様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：３３９２１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０１１５５

研究課題名（和文）学びのポートフォリオ共有による園と保護者の連携に関する研究

研究課題名（英文）Study on collaboration between kindergarten and parents through sharing learning portfolio.

研究代表者
佐藤　朝美（SATO, Tomomi）

愛知淑徳大学・人間情報学部・准教授

研究者番号：７０５６８７２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、園と保護者が連携し、パートナーシップの関係性を構築するためのポートフォリオを開発することを念頭に、設計要件を導くための調査を行った。写真を共有するシステムを利用している保育者と保護者へインタビューを行い、パートナーシップの構築のために、保育者と保護者の互いの専門的知識を提供し合う方法が課題として挙げられた。
そこで、保護者が園から提供された情報をもとに子どもの成長や学びについて深く考えていくために、園生活や活動の意義、園や先生の役割、保護者の成長と園との関連について振り返る支援を行うワークショップを開発・実践した。保護者の意識が変化し、そこから保育者との相互理解の可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
保育に関わる研究は、園における研究と、保護者の意識に関わる研究等両者に分かれ、多く行われている。さらに保護者に対しても「支援」という概念が根底にあるが、OECDが指針を示している通り、今後はパートナーシップの構築という連携が求めらる。本研究では、調査対象を保育者と保護者の両方に設定し、調査、活動の実施、ポートフォリオ構想に至った点で、その成果が学術的に意義があると考える。また、保育者と保護者の連携は現場では大きな課題と捉えられており、様々な企業が保育日誌アプリや業務システムを提供しているが、保育の質向上という視点が抜けている。本研究成果は、アプリ・システムの設計要件へも知見を提供する。

研究成果の概要（英文）：In this research, we conducted a survey to guide design requirements, with the goal of developing a portfolio for building relationships between resources by coordinating kindergartens and parents.Interviews were given to nurses and parents using photo-sharing systems, and the challenge was how to provide each other's privacy expertise of the nurses and parents to build the routing.
Therefore, in order for parents to think deeply about the growth and learning of children based on the information provided by the kindergarten, the significance of the kindergarten life and activities, the role of the kindergarten and teachers, the relationship between the parents' growth and the kindergarten. We developed and practiced a workshop that provides support for looking back. Parents' awareness changed, suggesting the possibility of mutual understanding with the caregivers.

研究分野：教育工学・幼児教育

キーワード：教育工学　幼児教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

核家族化や地域社会のつながりの希薄化を背景とし、家庭教育が困難な状況が指摘され、文部科学省では、「家庭教育支援チーム」等による保護者への学習機会や相談対応等の取組を推進している[1]。また、保育所に預ける子どもの低年齢化、長時間化に伴い、保護者の養育力の向上につながる保護者支援、家庭との連携が求められ、「保育所保育指針」第６章では、保育所における保護者支援を業務として位置づけている。国際的には、家庭との連携（family involvement）が、「支援」ではなく、「連携」「協働」の形態として検討されている[2]。子どもが園でどのような体験をし、何を学んでいるのか知ることを通じて、保育者（園）と保護者の信頼関係を形成することが､就学以降の子どもの育ちにも大きく影響するものとして､全米乳幼児教育協会(NAEYC) EDF プロジェクト[3]では、保育者（園）と保護者が子どもの体験や学びを共有するための方法を検討している。ハーバード大学（HFRP）の教育者・研究者達によるコミュニティ（FINE）[4]は、対面や書面に加え、テクノロジーを用いた連携の可能性を指摘している。保護者の「支援」に重きが置かれる国内での現状を踏まえ、参画につながる効果的な連携方法を検討することが急務である。

本研究は、「親の発達を促す省察的な家族対話を支援するファミリー・ポートフォリオに関する研究」[5]（以下、「過年度研究」という）を発展させるものである。親の成長や発達には、親自身が省察的に考え、子育てを実践していくための「リフレクションを促す家族対話」が重要であるという。過年度研究では、子どもの育ちに関わる気づきや家族の情報を写真とともに蓄積するファミリー・ポートフォリオ（以下 FP）を構築した。家族対話を促すために、週毎の家族新聞の発行機能、記録をもとに双六遊びができる機能も実装した。評価実践では、FP の使用を通して親としての発達・親性の向上がみられた。ただし、保育園に預けている親のインタビューにおいて、園での記録もポートフォリオ化したいとの要望が多くみられた。いっぽう、本研究分担者（松山）が代表の科研[6]では、保育で子どもが使用するタブレット端末アプリ（子ども達が発見したものを写真に音声を付けて蓄積する）を開発している。園での実践を通し、保育者からはこれらの記録、特に子どもが学んだ様子を保護者と共有したいとの要望があった。現在、共働き家族の子どもは保育園で過ごす時間が長い。そこで、園と保護者の双方から子どもの園での活動の共有を要望しており、蓄積された写真データを活用して子どもの体験や学びを共有する可能性があるという着想に至った。保育者の専門性をいかした子どもの学びを見とる視点とともに写真を提供することで、家庭側では、子どもの園での体験や学びへの理解が促進され、同時に保育者の専門性を把握することが園に対する信頼心につながるものと考える。これらの連携は保育の質向上だけでなく、家庭における豊かな学習環境をもたらし、就学以降へ引き継がれていくものと考える。家庭側での親子の活動に主軸を置いて連携を目指す本研究は、家庭支援研究に新たな知見を提供するものと考える。

２．研究の目的

本研究は、保護者の子ども理解を促すために、園での子どもの体験や学びを共有する方法を検討し、園と連携するポートフォリオの設計指針を導くものである。現状調査によれば、国内の保育者が家庭･保護者との連携で重視しているものは､連絡帳､園だより､登降園時の対話である。記録のデジタル化や連絡帳のネットワーク化、さらには園のブログの実装状況を鑑みれば、オンラインによる、特に写真を用いた連携の可能性は大きく、実現のために下記２点を明らかにする必要があると考える。

(1) 保育者から「園での子どもの体験や学び」を保護者に提供する項目と方法

保育者は日誌やドキュメンテーション、会報等で、写真や動画などとともに記録するケースが多くみられる。そこで本研究において連携すべき項目を検討するとともに、情報共有可能な写真を用いて効果的に伝えるよう要件を明らかにする。園における子どもの学びとは、「文字・数・思考」の習得だけでなく、遊びなどで友達と協力する、新しいことに好奇心を持つ、物事をあきらめずに挑戦する、色々なことに自信を持って取り組む等の項目が、「学びに向かう力」として着目されている[7]。しかし、「学びに向かう力」は目に見えて分かるスキルではなく、可視化や伝え方に工夫が必要とされ、園での経験の記録に加え、「学び」を見とる視点・発達観や保育観を付加する必要がある。そこでまず、保育者を対象にインタビュー調査を実施し、保護者に理解して欲しい項目や子どもと対話して欲しい点を明らかにする。

(2) ポートフォリオを活用した保護者の子ども理解を促すための支援方法

保護者が、子どもの成長に関与する園活動を把握することは重要であり、園からの情報をどの程度参考にするか、園と関わる機会がどれ位多いかにより、保護者自身の成長実感や子どもの意欲を尊重する態度に差が生じるという[7]。本研究では、園から提供される写真を活用した親子対話を通じて､子ども理解へとつなげる｡そこで､保育者の専門性を付加した情報も写真に付加し、園への信頼構築につながる対話活動を支援するポートフォリオの機能をデザインし、効果的な連携方法を検討する。

３．研究の方法

本研究の目的である園と連携するポートフォリオの設計指針を導くために、以下の２点から検討を行った。

(1) 【園からの情報提供の内容と方法】園での子どもの体験や学びを見とるための保育者専門的な知識とデータ（写真・コメント）とその提供方法
(2) 【家庭におけるファミリー・ポートフォリオ活動】提供されたデータ（写真・コメント）をもとに、親子で対話し、親が子どもへの理解を深めていく活動

(1)の園からの情報提供内容と方法を確定するために以下の調査を行った。
・ 伊レッジョ・エミリア市のドキュメンテーション、ニュージーランドのラーニングストーリー等保育記録に関わる先行研究の調査
・ 保育者が保護者へ共有を望む子どもの体験や学び、発達観に関する調査（保育者へのインタビュー調査）
・ 写真やコメントを用いた情報提供の方法としてｅポートフォリオ研究の調査

並行して、実運用されているデジタル連絡帳や写真提供サービスなどのシステム仕様についても調査を行い、情報共有方法について検討した。

(2)の家庭側で子ども理解、保育者の専門性の理解から信頼構築へとつなげるために、ポートフォリオのデータ活用した親子の活動を検討するために、以下の調査を行った。
・ 家庭の連携（Family Involvement）に関わる先行研究の調査
・ 子ども理解（Parental Knowledge）に関わる先行研究の調査
・ 親子対話、自伝的想起（ナラティブ）に関わる先行研究の調査

親がどのように子どもを理解し、園に対しての信頼を構築し、参画への動機を持つかに関して、上記先行研究を参考にし、本研究が目指す園と家庭の連携による効果の指標を作成した。連携の全体像をデザインするとともに、ファミリー・ポートフォリオ拡張機能の要件を導き出すこととした。

４．研究成果

近年、子どもの育ちに大きく影響するものとして、保育者と家庭との連携(family involvement)が求められている。先行研究の調査からは、「連携」をさらに進めた「パートナーシップ」が求められていることがわかった。

OECD は、保育の質を高める重要な政策課題の１つとして、「家族や地域の参画」を挙げている。親をパートナーと位置づけることで、親の力を保育の質の改善に役立てる可能性があるとしている[8]。全米乳幼児教育協会では、パートナーとして家族が参画する保育の実現を目指すテキストを作成している[9]。パートナーシップとは、同等の関係であると同時に、全く同じ役割を担うのではなく、子どもの成長、学習、発達に相補的で異なる貢献をすることが理想としている。相手方の視点を理解し、双方向コミュニケーションを行い、重要な決定について相談し、意見の相違を尊重して作業することで関係性が構築される。さらに、そのためのテクノロジーの重要な役割について言及しており、双方向コミュニケーション、意思決定のためのデータの収集と共有、コミュニケーションスタイルの多様化を可能にするツール、およびサポートネットワークを構築するため多くのアクセス可能な手段を提供すべきとしている。

いっぽう国内では、核家族化や地域社会のつながりの希薄化を背景とした家庭教育の困難な状況があり、文部科学省が「家庭教育支援チーム」による保護者への学習機会や相談対応の取り組みを推進している。また、保育所に預ける子どもの低年齢化、長時間化に伴い、保護者の養育力の向上につながる支援が求められ、保育所保育指針では、保護者支援を重要な役割として位置づけている。しかし、親は保育サービスの利用者、支援の対象とみなされ、よって保育の質は保育者によって決まると考えられる傾向がある。対等な連携意識、パートナーシップへの意識まで至らないのが現状である。

以上を踏まえ、保護者がパートナーとして参画できる連携機能を組み込んだポートフォリオを開発することで、関係性の構築に寄与できると考える。保護者の子ども理解を促し、園での子どもの体験や学びを共有するポートフォリオに保護者が積極的に関わることで、パートナーシップの関係性構築につながるものと考える。

そこで本研究ではまず、園と保護者が連携し、パートナーシップの関係性を構築するためのポートフォリオ（図 1）を開発することを念頭に、設計要件を導くための予備調査を行った。

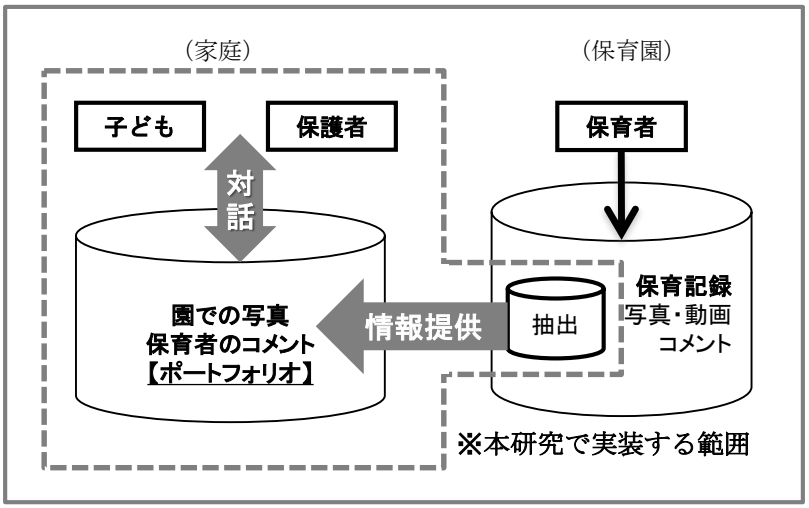

図1：子どもの学びを共有する家庭と園との連携の全体像

具体的には、「i アルバム」システム[10]を導入している H 幼稚園を対象にした調査である。「i アルバム」は 2000 年に 3 クラスで試行、2001 年から全クラスで導入された写真を共有するシステムで、「子どもに関する情報の共有」や「子ども像の共有」などの重要なやり取りが行われている。本園でシステムを利用している保育者（予備調査 1）と保護者（予備調査 2）の両側からインタビューを行うことで、ポートフォリオを介したパートナーシップの関係性構築への課題を明らかにした。

「予備調査 1」のインタビューから、保育者の「記録する行為から先生のリフレクションへ」、「保護者への連絡から保護者との密なコミュニケーションへ」と繋がる様子が伺えた。教員歴による差も見られ、新人教員には過去の蓄積がカリキュラム実践への予習教材となること、中堅教員にとっては後輩への指導のツールとなっていること、ベテラン教員にとっては、i アルバムを通して保護者との関係性を構築している園全体の特徴についての言及があった。共通の課題として、保護者へ「何を伝えるか」が重要と感じており、伝達文章の産出へ困難を感じているという点が挙げられていた。

「予備調査 2」のインタビューから、保護者は連携を重要と考えているが、先生との関係性は、対等ではなく、教えて頂くという存在という認識であることがわかった。さらに、家庭からの情報も重要とは考えておらず、双方向のやり取りには至っていなかった。一緒の目標に向かうチーム的な意識が持てる環境づくりが課題と考える。調査対象者が使用している「i アルバム」システムでは、双方向のやり取りが少ないので、園からの情報だけでなく、家庭からの情報について検討していく必要があることが課題として挙げられた。

情報の共有方法は、直接対話・電話・i アルバム・個人調査票・クラスだより・個別面談・家庭訪問等様々であり、メディアに伝えやすい情報があるとのことなので、トータルでの情報を意識しながら、ポートフォリオで支援できる部分を検討していくことが課題である。親の気がかり、関心事は、集団生活をうまく行っているか、友達とうまくやっているかという対人関係に関わることが多かった。保育者が狙いとしている園での学びについて興味関心を持ち、理解をしていくような仕組み・情報共有の方法を検討していくことも課題である。

以上を踏まえ、本研究では、保護者が子どもの成長や学びについて深く考えていくことが、パートナーシップ意識へつながり、関係性構築へ寄与するものと仮定し、ワークショップ（以下 WS）を開発した。その方法として、保育者が幼稚園の日常を撮影した写真を用いて親子がデジタルストーリーテリング（以下 DST）を行う活動を組み込んだ。

DSTWS の評価分析の結果から、保育者が撮影した園での子どもが写った写真を選び、ワークシートを通じて個人で振り返り、それらを参加者と共有した後に、映像を制作し、作品を親子で鑑賞するという一連の DSTWS を通して、保護者が子どもの成長や学びについて深く考えたといえる。具体的には、「園の活動」や「子どもの成長」についての話し合いで、園での活動を振り返り、活動を通しての子どもの成長について考えていた。映像制作では、写真から得られる情報だけでなく、より深い洞察がうかがわれる内容となっており、身体的、内面的、技術的等多くの成長について触れる作品が多く制作された。さらに「保護者の成長」についての話し合いでは、親が自身を意識し、他者との共有から色々な視点を持って振り返ることにつながった。2 作品のみではあるが DST 作品のナレーションにも反映された。「園や先生の役割」についての話し合いでは、先生や園に感じる安心感が生じる理由についての言及があり、3 作品のみではあるが DST 作品に先生の関係性に触れるナレーションへとつながっていた。写真を見て振り返ることに加え、ワークシートを通じた子どもの成長、保護者の成長、園や先生の役割についての話し合いが、DST

作品のナレーションにつながり、深く振り返る効果をもたらしたと考える。さらに保育者側にDSTWSの様子を伝え、インタビューに回答してもらった結果から、DSTWSが、実際に保育を行いながら写真を撮影している保育者自身のねらいと合致し、子どもをともに育てるという気持ちの共有に繋がる様子もみられた。パートナーシップの関係性構築への可能性が示唆されたといえる。

以上から、パートナーシップ構築につながる園と保護者の連携ポートフォリオの設計指針として、以下の項目が導き出される。

- 保育者が子ども成長のパースペクティブを描きながら日常を記録していけるような機能
- 保育者から保護者への共有方法として、ブログやメール、電話等複数の手段で連絡が取れるようなことを想定したアーカイブ機能
- 園からの一方向的な情報伝達・家族支援だけではなく、保護者が主体的に参画できるよう、アーカイブされた情報に何らかのアクションができるような機能
- 保育者と保護者が「共に育てる」協力体制に寄与する機能
- 多忙で日々の活動やリフレクションが難しい保護者に対し、容易に振り返りのできる環境、定期的にポジティブに取り組める環境を構築

現在、多くの育児日誌アプリが企業から提供されている状況であるが、上記設計指針を踏まえることでパートナーシップ構築に繋がる連携が生まれることと考える。

参考文献

[1] 文部科学省「家庭の教育力の向上」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/katei/1246352.htm
[2] 伊藤良高・中谷彪・北野幸子(2009)『幼児教育のフロンティア』晃洋書房
[3] EDF Project: https://www.naeyc.org/familyengagement
[4] FINE:
http://www.hfrp.org/family-involvement/fine-family-involvement-network-of-educators
[5] 文部科学省科学研究費補助金，基盤研究（C），研究成果報告書（平成25年度～平成27年度），佐藤朝美，2016.
[6] 松山ら（2016)「幼児の学びと保育の記録・省察を支援するタブレット用アプリの開発」第68回日本保育学会．発表ID806.
[7] ベネッセ教育総合研究所（2016）園での経験と幼児の成長に関する調査
https://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=4940（2018.02.14参照）
[8] OECD (2012) Starting Strong III ： A Quality Toolbox for Early Childhood Education and Care.
[9] KEYSER, J. (2017) From Parents to Partners: Building a Family-Centered Early Childhood Program. Redleaf Press.
[10] 松河秀哉，今井亜湖 (2002)インターネットを用いた幼稚園と家庭の連携システムの開発と評価．日本教育工学雑誌 26(1)，pp.45-53.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 佐藤 朝美，松河 秀哉，椿本 弥生，荒木 淳子，中村 恵，松山 由美子，堀田 博史	４．巻 43 巻 Suppl. 号
２．論文標題 園生活の保護者の振り返り支援を目的としたデジタルストーリーテリング・ワークショップの開発と評価	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本教育工学会論文誌	６．最初と最後の頁 61-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.15077/jjet.S43039	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 佐藤 朝美	４．巻 通号270
２．論文標題 園と保護者を連携する学びのポートフォリオ開発への予備調査	５．発行年 2019年
３．雑誌名 財団法人学習ソフトウェア情報研究センター 「学習情報研究」	６．最初と最後の頁 46-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 佐藤朝美・松河秀哉・椿本弥生・荒木淳子・中村恵・松山由美子・堀田博史
２．発表標題 Development and Evaluation of Digital Storytelling Workshop that Aims to Promote Reflection Children's Growth for Parents in Japanese Kindergarten.
３．学会等名 中国心理学会開発心理委員会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 佐藤朝美・松河秀哉・椿本弥生・荒木淳子・中村恵・松山由美子・堀田博史
２．発表標題 園生活の保護者の振り返り支援を目的としたデジタルストーリーテリング・ワークショップの開発と評価
３．学会等名 日本教育工学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 佐藤 朝美，松河 秀哉，堀田 博史，中村 恵，松山 由美子，荒木 淳子，椿本 弥生
２．発表標題 園と保護者を連携する学びのポートフォリオ開発に関する予備調査
３．学会等名 日本教育工学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 佐藤朝美
２．発表標題 自主企画シンポジウム『幼児教育におけるメディアの効果的な活用法を探る』
３．学会等名 日本保育学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 佐藤朝美・松河秀哉・堀田博史・松山由美子・中村恵・椿本弥生・荒木淳子
２．発表標題 学びのポートフォリオ共有による園と保護者の連携：幼稚園教諭インタビューによる検討
３．学会等名 第14回子ども学会議（日本子ども学会学術集会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	椿本　弥生 (TSUBAKIMOTO Mio) (40508397)	東京大学・教養学部・特任准教授 (12601)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	荒木　淳子 (ARAKI Junko) (50447455)	産業能率大学・情報マネジメント学部・教授 (32715)	
研究分担者	堀田　博史 (HOTTA Hiroshi) (60300349)	園田学園女子大学・人間健康学部・教授 (34516)	
研究分担者	松山　由美子 (MATSUYAMA Yumiko) (90322619)	四天王寺大学短期大学部・その他部局等・教授 (44422)	
研究分担者	中村　恵 (NAKAMURA Megumi) (90516452)	畿央大学・教育学部・准教授 (34605)	
研究分担者	松河　秀哉 (MATSUKAWA Hideya) (50379111)	東北大学・高度教養教育・学生支援機構・講師 (11301)	